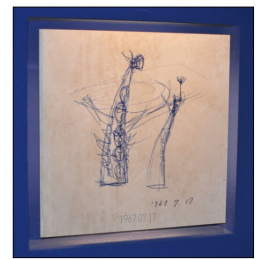


岡本太郎の世界よみがえる



1970年、大阪千里丘陵で行われた大阪万博。歴代万博の来場記録を塗り替えた。今回、清風新聞取材団は参加した文化プレスセンターイベントにおいて、EXPO70のシンボル「太陽の塔」内部を取材することができた。(福田萬里・傳裕彦)

1970年に開催された大阪万博。世界各国の様々なパビリオンが立ち並んだ。日本も含めてである。しかし異色の光を放った「太陽の塔」の存在は、あらゆるパビリオンを凌駕していた。薄暗い通路の傍で目を奪う「太陽の塔」のスケッチ達。実際に制作されたフォルム(右下写真)へ



至るまでの変遷をみることもできる。一つ一つが、放つ混沌の雰囲気は岡本太郎の奇才さを示している。少し歩くと出会う地底

の太陽。こちらをにらみつけ、迫力と独特な雰囲気、形相という言葉が相応しいだろう。千変万化する顔は月の満ち欠けのようである。

塔内部では、世界観が180度変化する。幻想的な空間と音楽の絶妙なハーモニーが岡本太郎の世界との究極のマッチを

生んでいるからだ。天まで伸びる生命の樹の壮大さはすべてを包み込み、「太陽の塔」の大きさを人々に認識させる。底でうごめいていたカンプリア紀の生物が、階段を登るたびに大地を歩く恐竜、哺乳類へと進化していく。太郎の斬新さの現れだろう。

「太陽の塔」は一世を風靡した「岡本太郎の世界」の体現であり、あらゆる人間を魅了する。



1970年大阪万博の概要

- ◆開催期間 1970年3月15日～9月13日
- ◆開催地：大阪府吹田市千里山
- ◆テーマ：人類の進歩と調和
- ◆最終利益：約2000億円
- ◆総来場者：6,421万8,770人
うち外国人：約170万人

70年に学ぶ跡地活用計画

70年の大阪万博閉幕後、跡地は万博記念公園として整備された。京阪神の在住者であれば、一度は訪れた経験があるはずだ。その公園は、実は万博開催後の1972年に策定されたマスタープランに基づいたものだ。

万博開催がなされた土地は元々千里丘陵とよばれ、竹林を切り開いた同地は万博開催のテーマと対極にある「環境破壊」の賜物だった。そのため大蔵大臣の諮問機関であった万国博覧会跡地利用懇談会は「跡地は万国博の開催を記念するにふさわしい『緑に囲まれた文化公園』とし、この中に平和を追求するピース・リサーチ(平和探求)の研究

所などを設置する」という基本方針を決定。公益財団法人関西・大阪21世紀協会万博記念基金事業部の二階堂洋史氏は「(跡地を)森に返すようなもの」だと説明。公園整備計画は3つに区分。跡地から公園への転換を図る「創世期」(最初の8年間)、緑に包まれた公園の完成を位置付ける「育樹期」(次の17年間)、公園の充実とする「熟成期」(2000年以降)に分けている。

現在でも数多くの訪問者がいる万博記念公園の整備は成功と言える。70年に学び、夢洲万博においても計画的な跡地活用が求められる。

(矢吹育万・永田大智)

万博終了後にも存置され、北摂地域のシンボルとなっている太陽の塔。内部は万博終了後から46年間放置されていた。人と宗教を表した「いのり」や地球46億年の生命の進化を表した「生命の樹」なども万博終了後

に閉鎖された。「地底の太陽」(下写真)は万博終了後の混乱で行方不明

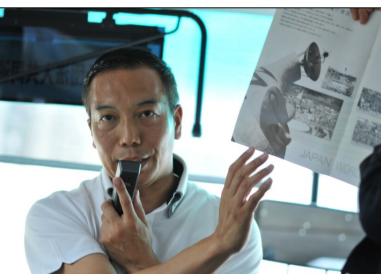
太陽の塔 復元までの歩み

の塔」の耐震工事とともに、内部「生命の樹」に「地底の太陽」の復元

塔内部の復元では、内側にコンクリートを打ち付けて強化し新しい壁を取

り付けるといった耐震工事が行われた。「生命の樹」の展示物は修復や軽

い材質で代替新造された。「いのり」エリアは、当時の展示物を一部復元し、フィギュアメーカー海洋堂の協力のもと行方不明だった「地底の太陽」を復元した。原図は喪失したため、写真や関係者の聞き込みで原型を制作



▲解説して下さった二階堂洋史氏

いのちのテーマ 夢洲で

1970年、大阪・千里丘陵で、アジア初の万国博覧会が開催された。来場者数は万博史上最多の6421万人を記録した。そしてこのイベントの象徴である太陽の塔には4つの顔がある。腹部の「太陽の顔」(右上写真)、頂部の「黄金の顔」(右下写真)、背面の「黒い太陽」(左下写真)、地下の「地底の太陽」(左写真)である。これは「過去」「現在」「未来」といった時間軸を表している。製作者の岡本太郎は「人間の身体、精神の内にはいつでも人類の過去、現在、未来が一体になって輪廻している」と語っている。

70年万博は「人類の進歩と調

和」をテーマに掲げ、永遠の平和への願いと「21世紀への架け橋」との思いをこめた。戦後日本の国威を世界に示すとともに東洋思想の「和」の心を現代世界に呼び戻すためだ。

一方2025年万博は、これまでの万博の伝統を受け継ぎ、世界の創造的活動の成果を展示する必要がある。そして人類社会の調和のとれた発展に貢献するのが目的である。

大阪市此花区夢洲に誘致を計画している2025年大阪万博の「いのち輝く未来社会のデザイン」は、70年万博の「人類の進歩と調和」を夢洲で具体化するものだといえる。(上橋遥翔)

